

昔老翁あり、母を竹取の翁といふ。この翁、季春の月に、丘に登り遠く望す。忽ちに羹を煮る九箇の女子に値ひぬ。百の嬌は備なく、花の容は匹なし。ここに娘子等、老翁を呼び嗤ひて曰く、「叔父来れ、この燈火を吹け」といふ。ここに翁唯々といひて、漸くに趨き徐に行き、座の上に着接きぬ。良久にして、娘子等皆共に笑みを含み、相推譲りて曰く、「阿誰かこの翁を呼びつる」といふ。すなはち竹取の翁謝まりて曰く、「非慮する外に、偶に神仙に逢ひぬ。迷惑ふ心、敢へて禁むる所なし。近づき押れぬる罪は、希はくは贖ふに歌を以てせむ」といふ。即ち作る歌一首 并せて短歌

三七九一番

みどり子の 若子髪には たらちし 母に懐かえ 襜褕の 平生髪には 木綿
 肩衣 純裏に縫ひ着 頸付の 童髪には 結ひ幡の 袖付け衣 着し我をに
 ほひよる 児らがよちには 蟻の腸 か黒し髪を ま櫛もち ここにかき垂
 れ 取り束ね 上げても巻きみ 解き乱り 童になしみ さ丹つかふ 色な
 つかしき 紫の 大綾の衣 住吉の 遠里小野の ま櫛もち にほしし衣に
 高麗錦 紐に縫ひ付け 刺部 重部 なみ重ね着て 打麻やし 麻統の子ら
 あり衣の 宝の子らが うつたへは 綜て織る布 日ざらしの 麻手作りを
 信中裳成 者之寸円取為支 屋所終 稻置娘子が 妻問ふと 我におこせし
 彼方の 二綾裏沓 飛ぶ鳥の 明日香壮士が 長雨忌み 縫ひし黒沓 刺し
 履きて 庭にたたずめ 罷りな立ちと 禁め娘子が ほの聞きて 我におこ
 せし 水縹の 絹の帯を 引き帯なす 韓帯に取らせ 海神の 殿の薨に
 飛び翔る すがるのごとき 腰細に 取り飾らひ まそ鏡 取り並め掛けて
 己が顔 かへらひ見つつ 春さりて 野辺を巡れば おもしろみ 我を思へ
 か さ野つ鳥 来鳴き翔らふ 秋さりて 山辺を行けば なつかしと 我を思
 へか 天雲の 行きたなびく かへり立ち 道を来れば うちひさす 宮女
 さすたけの 舍人壮士も 忍ぶらひ かへらひ見つつ 誰が子そとや 思はえ
 てある 如是 所為故為 古 ささきし我や はしきやし 今日やも児らに
 いさにとや 思はえてある 如是 所為故為 古の 賢しき人も 後の世の
 鑑にせむと 老人を 送りし車 持ち帰りけり 持ち帰りけり

反歌二首

三七九二番

死なばこそ 相見ずあらめ 生きてあらば 白髪児らに 生ひざらめやも

三七九三番

白髪し 児らも生ひなば かくのごと 若けむ児らに 罵らえかねめや